
野球少年リリカルゆうと

うさぎ症候群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球少年リリカルゆうと

【Nコード】

N7752T

【作者名】

うさぎ症候群

【あらすじ】

野球が好きな少年・悠斗は海鳴の地でどう過ごしていくのか。

プロローグ（前書き）

処女作です

ブローグ

「お母さん、この荷物どこにおけばいいー？」

少し大きめのダンボールを抱えた少年は、少年とも少女ともとれるような少し高めの声を発した

「んー、とりあえずリビングに置いといてちょうだい」

「はい」

少年は真新しいピカピカのフローリングの床を、あぶなげなく進んでいく

すでに開いているドアを進むと、大きめの体格のがっちりした男性の背中が見えた

「おお、悠斗か。その荷物は？」

少し声の低い、件の男性が振り向きながら、少年・悠斗に声をかける

「お父さん、これリビングについてお母さんが」

「じゃあそこに置いとけ」

「はい」

そう言うと父は別のダンボールを手にリビングから出て行った

そして悠斗は部屋の隅へダンボールを置く

「あなた、悠斗、ご飯にしましょ」

いつの間にかリビングに戻ってきている母・綾香^{あやか} は大きめの声
で 別の部屋へ行った父にも聞こえるように 声をかけた

玄関にあった大きな引越業者の車はすでに去ったようだ

「あとはリビングと玄関のダンボールだけか」

父・雅哉^{まひや}はあたりを見渡し言う

悠斗は昼食の用意を手伝いながら、ここ海鳴と、この4月^{新天}に入学することになった私立聖祥大学付属小学校に胸を馳せるのであった

プロローグ（後書き）

いろんな人のを読んでるとつい書きたくなりました
2〜3日に1回をめぐに更新していきたいです（予定）

第1話〜入学〜（前書き）

予約投稿

第1話〜入学〜

籐洞悠斗は緊張していた

周りを見ると自分だけではないのが伺える

それは当然だろう

ほとんどの人がお互い知らない人であり、公立ならいると思われる、幼稚園保育園の同級生も私立ゆえにいないのである

本人たちにとっては長い時間だっただろうが、現実には数分もしないでドアが開いた

おそらく彼女が担任の先生であろう

その女性は柔らかな声で開口一番こう言った

「では、体育館へ行きますよ」

無事入学式も終わり 全員緊張でガチガチだったが

大抵の学校は今日は後は下校するだけであろう

しかし担任は今日の様子を見て思ったのだ

「これから自己紹介してもらいます」

自己紹介をするべきだと

・
・
・

「高町なのはです。好きな食べ物はシュークリームです。よろしくおねがいします」

夕行にはいった自己紹介もだんだん慣れてきたのだろう、最初に比べてずいぶんスムーズになった

最初はなにを言ったらいいのかという顔をしていた子どもたちも、好きなもの、将来の夢、いろいろ考えている顔をしている

「月村すずかです。得意なことは運動です。よろしくおねがいします」

次は悠斗の番である

好きなことは決まっているので、頭で考えていた自己紹介を読み上げる

「藤洞悠斗です。好きなことは野球で、将来の夢もプロ野球選手です。よろしくおねがいします」

自己紹介も終わり、解散を宣言され各々帰^{おの}っていく中で、トイレに行っており、変える時間がずれた悠斗は大きな声を聞いた

「痛い？でも大事なものを取られちゃった人の心は、もっともっと痛いんだよ」

そこには今にも取っ組み合いを始めそうな栗色の髪と金色の髪をした少女二人と、その横でおろおろしている紫色の髪をした少女がいた

悠斗は平和主義者である

スポーツや、ルールの決まった競争事には本気を出す、暴力を伴う行為は嫌いである

ゆえに

「喧嘩はだめだよ！その子もおろおろしてるだけじゃなくて、自分で言わないとつたわらないよ」

口をだしてしまうのである

もともと、”子供の”喧嘩というのは第三者が口をだすものではない
当事者で解決するのが一番なのである

だが、ここは私立である

少女たちは頭がよかった

「や、やめてください」

紫の髪の少女が控えめに、しかしはっきりした口調で言つと

「わ、わるかったわね」

金色の髪の少女も自分が悪いのはわかったのだろつ、バツの悪そうな顔をして言つた

栗色の髪の少女も

「ぶつてごめんね」

「い、いいわよ。わたしが悪かったんだから」

この様子を見て少年はひとりうなづくのであった

第1話〜入学〜（後書き）

自己紹介にアリスがないのはあいうえお順で離れているからです
高町の「た」と月村の「つ」は近いんですけどね
それ以外の理由はありません

主人公が大人びてますが仕様です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752t/>

野球少年リリカルゆうと

2011年10月9日05時09分発行